リレーエッセイ「私のsweet水都」

ディルクヤン・コップ

在大阪・神戸オランダ総領事

今年は日蘭史400年の節目

2008年と2009年は日本オランダ年です。昨年は日蘭修好通商条約締結150周年、今年は徳川家康から通商許可を得て400周年にあたります。

鎖国をしていた江戸時代、西洋諸国で唯一の友好国であるオランダは日本にとって特別な存在でした。日本人は、オランダ語の書物を通して西洋の最新知識を得る蘭学という独自の学問を編みだしました。進取の気風を持つ若いサムライたちは蘭学を学び、大坂の適塾は日本の屋台骨となる傑物を輩出します。

開国後も、オランダ人は日本の近代化を支えました。阪大医学部の基礎である大阪の舎密局創立にもオランダ人が寄与しています。そして「水都大阪2009」に際して特筆したいのが、淀川の改修工事と大阪港の築港を指導したヨハネス・デ・レイケもオランダ人だということです。

川の景観を裏口から玄関へ

アムステルダムも水都なので、「水都大阪2009」には関心があります。私も大川を船で巡ったことがありますよ。桜並木がきれいでした。しかし建物が道路に面して建っているので、川からの景観は“まちの裏側”のような印象を受けました。

アムステルダムの建物は運河に面して建っており、水辺にはテラスやカフェがあります。水辺のあり方を根本的に見直すことが、水都再生に必要ではないでしょうか。

それに暮らしの中で、船にもっと親しめるといいですね。オランダではセーリングが一般的なレジャーですし、アムステルダムには船に居住できるボートハウスもあります。広々として快適ですよ。土地の狭い大阪も水辺の有効利用として取り入れてはどうでしょう。オランダでは人口密度の増大と水位上昇の対応策として水上建築に力を入れており、ハリケーン被害に遭ったニューオーリンズ復興にも技術者が派遣されています。

自由な空気が柔軟な発想を生む

かつてオランダは日本へ西洋の技術を伝える手助けを行いました。今、両国に必要なのは技術ではなくアイデアの交流です。

水都だけでなく、オランダと日本には共通項が多くあり、経済や文化の分野でさまざまな取り組みが活発に行われています。私たちも「チューリップと風車」というステレオタイプではないオランダを発信していきたいと思っています。たとえばアートもその一つ。昨年の「フェルメール展」にはのべ80万人もの入場者がありました。また「100%デザイン東京2008」に出展したダッチデザインも高い評価を受けました。「どうしてオランダのアートシーンは元気がよいのですか」と聞かれると、私はよい美術学校があることに加えて「若い芸術家が自分らしさを表現できる自由な都市の空気」と答えています。

新進画家が描いたオランダ女王像。
伝統と現代の融合、自由闊達な市民社会を象徴するかのようだ。

ディルクヤン・コップ（Dirk Jan Kop）氏

1986年	オランダ外務省入局
87～89年	在モスクワ大使館政治・文化広報担当三等書記官
89～92年	外務省国連政治問題部非核軍備管理課化学兵器政策担当官
92～96年	在ロシア・サンクトペテルブルク総領事館領事兼総領事代理
96～99年	外務省総務局亡命者保護・移住課上級政策担当官
99～00年	外務省人的移動・移住・領事問題局法務・内政問題および司法・警察協力課上級政策担当官兼課長代理
00～05年	在ウィーン国連オランダ政府代表部大使館評議員兼公使
05年～	現職